



アニメーションのホームズ

ホームズが最もエキセントリックなかたちで描写されるのは、子ども向きの作品——マンガの形態だ。1946年という早い時期に、ダフィ・ダックが“The Great Piggy Bank Robbery”の中でホームズに会っている。1986年には、ディズニーがネズミの名探偵バジルのアニメを制作した（邦題『オリビアちゃんの大冒険』）。バジルは友人のドクター・デヴィッド・Q・ドーソンと一緒にベイカー街221Bの壁の向こうに住んでいる。モリアーティに相当するラティガン教授の声はヴァインセント・プライスがあてた。

1980年代には、アメリカのテレビアニメ *Scooby Doo*（邦題『スクービー・ドゥー』）にホームズのゴーストが現れたほか、“Elementary, My Dear Turtle”ではティーンエイジ・ミュタント・ニンジャ・タートルたちがホームズの助けを得て、モリアーティの世界征服の野望をくじく。1999年のテレビ・シリーズ *Sherlock Holmes in the 22nd Century* では、ホームズが生物学者の手によって復活し、モリアーティのクローンと戦う。彼を手助けするため、レストレード警部の“コンピュードロイド”がワトソンの記録を読んで名前や顔、声、癖を身につけ、ワトスンになりきるといったもの。また2010年には、劇場用映画でホームズがトム&ジェリーと会っている。

*Approaches*（邦題『20世紀のシャーロック・ホームズ』）として劇場公開された。制作はレンフィルムで、ホームズをワシリー・リヴァーノフ、ワトソンをヴィタリー・ソローミンが演じたが、二人は外見の「英国人らしさ」とパジェットの挿絵に似ているところから起用された。プロットは正典に忠実だが、かなりのユーモアがちりばめられている。

確固たるホームズ像？

1980年代から90年代にかけて、英国の俳優ジェレミー・ブレットは、多くの人がこれこそホームズだと言うような存在となった。グラナダ・テレビ制作のこのシリーズは、真性ホームズを生み出すことを意図しており、コナン・ドイルがホームズに与えた属性をブレットほど数多く具体化させようとした俳優は、いないだろう。シリーズのプロデューサーであるマイケル・コックスが言うように、ブレットは「その声、知的なところ、存在感、身体つき、障害物を飛び越える能力、変装がうまいと思わせる力、馬の扱いなど、〔ホームズに〕必要なものをすべてもっていた」のである。

世界中のファンにとって、ブレットこそが真のホームズだった。その魅力的な演技、抑制された奇抜さ、気取った話し

“人々はホームズとワトスンに惚れ込むのではなく、彼らの人間関係、友情に惚れるのだと思う。スティーヴン・モファット BBC『SHERLOCK』の脚本家”



ジェレミー・ブレットは1984～1994年のグラナダ・テレビ・シリーズでホームズを演じた。彼は「これまでに演じた中で最も難しい役だった」と言っている。

方、そして猛烈な怒りの噴出が融合して、不朽のホームズ像をつくり出したのだと言えよう。ブレットの相手をつとめたのは、二人の対照的なワトスンだった。デヴィッド・バークが敏感ながらも時として陽気な演技をする一方、8年にわたってこの役を演じたエドワード・ハードウィックは、誠実さと我慢強さを強く感じさせ、静かな説得力をもっていた。

21世紀のホームズ

21世紀に入っても、世界中の人たちがこのベイカー街の名探偵に魅了され続けた。2009年と2011年、英国の映画監督ガイ・リッチーにより、ホームズはコミックスの中から抜け出てきたような誇張されたアクションヒーローとして現れた。無法者っぽい味付けで演じるのは、アメリカの俳優ロバート・ダウニー・ジュニア。ホームズの欠点と悪癖が強調され、一種風刺的になっている。

ガイ・リッチーの映画『シャーロック・ホームズ』（2009年）は、1890年代のロンドンを舞台としている。ロバート・ダウニー・ジュニアのホームズがボヘミアンである一方、ジュード・ロウのワトソンは、時には怒るものの寛大だった。続編は2011年公開。

一方、テレビ界では二つの意欲的な作品が、ホームズとその世界を現代にもってくるという“再創造”を行った。ひとつは2012年にプレミア上映をしたアメリカの *Elementary*（邦題『エレメンタリーホームズ&ワトソン in NY』）で、薬物依存症でリハビリ中のホームズ（イギリスの俳優ジョニー・リー・ミラー）がニューヨーク市警の手助けをするというもの。彼の女性ワトソン（ルーシー・リュー）は、元外科医で、最初はホームズの再発防止の付添人だったのが、一緒に事件捜査をするうちに一種の弟子になっていく。回が進むにつれ、モリアーティやアイリーン・アドラーといった正典中の人物も加わり、予期せぬひねりの効いたストーリーが展開する。

ホームズを現代にもってくる設定のテレビ・シリーズは、英国のほうが早かった。



スティーヴン・モファットとマーク・ゲイティスという、ホームズファンを標榜する二人の脚本による、BBCテレビの *Sherlock*（2010年スタート、邦題『SHERLOCK／シャーロック』）だ。ハイテク時代のロンドンで活躍するホームズは、最新テクノロジーを本来のホームズ的なやり方で駆使して事件を解決する。“推理の科学”というブログまで書いているほどだ。

この番組は世界中で大成功を収め、特

に若い世代から支持を得た。テンポが早く、ユーモラスで、オリジナル正典を使った興味をそそるプロットが詰まっているからだ。しかも主演の俳優二人は、正典中でホームズとワトソンが最初に出会ったときの年齢に近い。ベネディクト・カンバーバッチのホームズは、いわば変人だが、傲慢で社会不適応であるにもかかわらず、非常に魅力的な人物だ。またマーティン・フリーマンのワトソンは、自分独自の考えと友人に対する忠誠心が混ざって、不安定になっている。“死んだ”はずのホームズが戻ってきたときに彼は思わず暴力をふるうが、正典中のワトソンのなまぬるい反応（単に気絶する）に比べたら、現実的かつ自然な行為と言えよう。

125年以上前に活字として現れて以来、シャーロック・ホームズは途切れることなくメディアに出つづけてきた。コナン・ドイルの創造した人物は、文学の枠を越えて世界的な現象となり、今でも新たなファンをつくりつづけているのである。■

BBCテレビの『SHERLOCK／シャーロック』は、ホームズたちを現代社会に連れてきた。ホームズ役はベネディクト・カンバーバッチ。マーティン・フリーマンのワトソンは、事件記録をブログで行った。